



神苑の決意

主張

神道と原発—「アンダー・コントロール」の思想を疑う

東日本大震災より、先月十一日で六年を迎えた。震災による死者・行方不明者は一万八千人を超える。近時、類例を見ない大災害であった。全ての犠牲者に心から哀悼の意を表したい。

震災犠牲者の死因は、約九割が溺死といわれている。震災による大津波が招いたものであることは、想像に難くない。

津波は、さらに三陸沖の原子力発電所を襲い、東京電力・福島第一原子力発電所は、全電源喪失に陥った。これにより格納容器の圧力が上昇し、水素爆発やメルトダウンあるいはメルトスルーという悪夢のような事態を招き、大規模な放射能汚染が発生したのである。

本号の内容

【主張】神道と原発—「アンダー・コントロール」の思想を疑う（木川智）：1 / 【解説】「選別爆撃」としての東京大空襲—米軍資料から見る—（高井七海）：3 / 【連載】アジア放浪記—タイ王国を見て皇国を尊ぶ④（仲村之菊）：5 / 【連載】『倭姫命世記』を読み解く④—天孫降臨について—（柳凜）：8 / 活動報告：10 / 花瑛塾日誌：16 / 編集後記：16

頒価：1部千円
(送料別途160円)

原発事故により福島第一原発付近の地域には避難指示が発令され、地域はゴーストタウンとなっていた。除染作業や復旧作業が行われ、少しずつ住民の帰還も進められているが、多くの地域はいまだ帰宅困難区域や居住制限区域となっている。あの日、着の身着のまま故郷を追われた人々の身の上を思うと、居た堪れないものがある。

さらに考えるべきは、人々と共にあった地域の神社やそこに鎮まる神々のことである。避難指示が出され人々が故郷を追われ、神社の神々は毎日のお供えや祭を受けることも困難となった。神々の荒びを思わずにはいられない。神道家は、こうした点からも自身の信

仰を前提として原発事故を総括していかなければならないはずだ。

「神苑の決意」 主筆 木川智

核の平和利用論と神道

昭和三十年に開催された宗教世界会議において、神社本庁は原水爆禁止の議案を提出した。このことは核なき世界を求める花瑛塾の主張とも合致するものだが、議案は同時に、核の平和利用の推進を求めている。

核の平和利用とは、端的にいえば原子力発電のことである。原子力を用いた発電は、大規模かつ安定的にエネルギーを得られ、エネルギー不足の終戦後において、「夢のエネルギー